ブックレット
近代文化研究叢書
19

Hello, Auxiliary Verbs!

はじめまして、助動詞

はてしなく深くて不確かな古典文法の世界

須永 哲矢

昭和女子大学 近代文化研究所

目次

はじめに……3
序説……5

Part I　古典文法の深淵へ

第1章　活用形概説……15
1. 活用形の形式と意味……15
（1）形式―活用形と語末母音……15
（2）活用形の意味への序説……18
2. 「連用と連体」から……20
（1）連用修飾と連体修飾……20
（2）狭義「述語」としての連用中止・連体終止……21
（3）連体形とは―終止形に「の」を足した意味……22
3. 「未然と已然」から……26
（1）未然と已然……26
（2）補説「仮定形」……27
（3）「未然」「已然」それぞれの意味……28
（4）已然形と連用形……29
4. 助動詞にとっての活用形……30

第2章　助動詞と、それが接続する活用形……32
1. 「ず」「む」「じ」―「非現実」としての打消、意志・推量……35
（1）打消の助動詞「ず」……36
（2）意志・推量の助動詞「む」……37
（3）打消意志・打消推量の助動詞「じ」……39
2. 助動詞「む」を起点とした、推量表現体系……40
（1）「まし」「まほし」「まうし」―「ま」語形の展開……40
（2）「らむ」「けむ」―「む」語形系……42
3. 「む」ならざる〝推量〟〝推定〟―終止形接続の助動詞の位置……43
（1）「べし」「まじ」―話者の個別性を超えた絶対性……43
（2）「なり」「めり」「らし」―認識者から独立し得ない事実……46
4. 「現実」としての過去・完了……50
（1）過去と完了の違いと、現代語……50
（2）「き」「けり」―過去表現形式の棲み分け……51

（3）「つ」「ぬ」―完了と強意……53
（4）「たり」「り」―存続から完了へ……55
5．ここまで扱われていない「助動詞」……57
（1）「たし」―成立時期の違い……57
（2）断定「なり」―名詞の述語化……58
（3）「たり」「しむ」「ごとし」―文体の違い……58
（4）「る／らる」「す／さす」―別動詞としての成立……59
6．活用形、再論……60

Part II　古典文法の彼方へ

第1章　古典文法を学び、古典文法で遊ぶ―学生からの出力……67
第2章　擬人化助動詞・活用形キャラクター大図鑑……73
ず……78
む……80
じ……81
まし……82
まほし・まうし……84
けむ・らむ……86
べし・まじ……90
き・けり……92
つ・ぬ……94
たり・り……96
らし……98
めり……99
なり（伝聞）……100
なり（断定）……101
る／らる・す／さす……103
未然形……104
連用形……105
終止形……106
連体形……107
已然形……109
命令形……110
第3章　擬人化キャラクターを利用した展開
―漫画で学ぶ活用形……112
おわりに……140
主要参考文献……142

はじめに

学校で学ばされた古典文法。特にその要点とされる助動詞。無味乾燥で、意地の悪いひっかけ問題に使われ、読めるはずの文をかえって読めなくしているような、つまらないやつ。教科書に載っている物語が、多様な表情を見せるのに対し、文法は冷たくて、どこまでいっても無表情なまま。そんな文法に表情が見えたのは、大学に入ってからだった。

高校までに覚えさせられたのは、文法について考えるための前提に過ぎず、そこから考えることはいくらでも広がる。文法とは、覚えるものではなく、考えて、自分でつくり出すものであり、学校で暗記させられたあの活用表も、誰かが考えた結果であった。そして別の誰かには、別の考えがあり、意外にも、そもそもわかっていないことがいくらでもある。無機的な表に閉じ込められていた助動詞が、活用形が、未知の生き物のように見えてくる。あれ？　面白いぞ、この世界…。気づけば大学で、古典語の文法を教えるようになっていた。

講義で意識しているのは、知識や方法ではなく、面白さを伝えること。なんなら面白いと思ってもらえなくても構わない。でも、こんなものを面白いと思う人間もいるらしい、程度のことは思ってほしい。そんな思いで日々、文法の話をしている。学校教育で文法がつまらないのは、そもそも教える側が面白いと思っていないことによる面が大きいと思っている。物語を読むのとは違い、文法は答えが決まっていて、間違いがあってはいけない。だから表を覚えこませるしかないし、味わったり考えたりする余地もない。だが、それは誤解である。

本書が目指しているのは、高校教育で学んだ古典文法を発展させ、より正確に、詳しく学ぶことではない。より良い教授法を示そうというものでもない。古典語を素材として、言語というものを考えることの面白さ。こんなものを面白いと思っている人たちは、何を見つめ、何を考えているのか。それを示すだけである。教育に携わる人たち、教職志望の学生たちにとって、対象の面白さ、あるいは不思議さ・深さ（それが嗜好に合えば面白さにつながる）を身をもって感じること以上に大切なことはない。教える立場で伝えるべきことは「私には正確な知識があり、私には解けます」ということではあるまいから。

このようなマニアックな課題設定の本書であるが、高校古文で教える文法の内容をベースに、議論を深めていく形をとった。直接学生に対して教授されるべき内容ではないものの、教育にあたる人たちの古典語へのより深い理解・興味につながるよう企図したものである。あるいは教育者でなくても、学校であれ、塾であれ、妹や弟に対してであれ、古典語の文法を楽しく語る小ネタが一つでも増えたら…。そんな軽い気持ちで読んでいただければと思う。

本書は、ＰａｒｔⅠ、ＰａｒｔⅡの二部構成を取る。ＰａｒｔⅠは助動詞・活用形を中心とした古典文法の概説、ＰａｒｔⅡは古典文法を素材として何ができるかというちょっとした実践例である。両部でテイストは大きく異なるものになっているが、その根底には私自身の古典語教育に対する関心が共通に横たわっている。再三述べたとおり、「古典文法の面白さを伝えたい」である。

ＰａｒｔⅠは、普段講義で話している古典文法の体系（の一部）を、現時点においてまとめることを試みた。暗記するだけに見えていた文法に、どれだけ考えるべきことがあるか。そして知らなかった深みを知るたび、正確で答えが決まっているかに見えた世界が揺らぎ、考えるほど

わからなくなっていくことだろう。本書は提起した問いすべてに説明を与えるものではなく、私自身も解答を持ち合わせているとは限らない。しかし、そのような不完全さを承知のうえで、それでも不揃いで不確かな形で、今の私に見える限りの古典文法を語った。１００％の「正しさ」の外側に広がる不確かな領域の中にこそ、文法の面白さがあるから。そして考えれば考えるほどわからなくなっていく、その深みをさまよう経験こそが、文法を考える面白さだと思うから。古典文法の、深淵へ。

ＰａｒｔⅡは、教育という観点からは、ちょっとした実践報告にあたる。すでに表紙や口絵にも登場しているキャラクターたち。彼女（彼）たちは、ＰａｒｔⅠで語る世界観のもと擬人化された、助動詞（および活用形）である。学生とのプロジェクト活動で、助動詞を擬人化した成果（遊び）をまとめたものである。こちらはイラスト集のような体裁になっているが、暗記することをゴールとしがちな助動詞をスタート地点に置いて、何か新しいことができないかと、試行錯誤した結果である。学校で学んだ文法が、誰かが考えた、数ある可能性の中の一つであったように、文法の解釈、受け止めは無限にあってよいし、「教育」「研究」という真面目なジャンルに収まらなくたっていい。文法の可能性と面白さの一例として、紹介することにする。学び、考えた古典文法の、彼方へ。

活用表という平面にきれいに収まり、規則・法則として均質化された助動詞は、整った顔立ちで無表情である。だが、人間が長い時間をかけて自らの分身のようにつくり出した言葉が、そんな風に無機質なはずはない。ひとたび活用表の下に広がる深みを覗けば、均質で平面的だった世界は果てしなく深く、不確かになり、言葉が脈動する。本書を構成する二部それぞれを通して、助動詞という文法形式一つ一つの表情を感じていただけたら幸いである。

高校で助動詞に散々いじめられた記憶がある人も、ほとんど覚えられなかった人も、「覚えて、できなければいけないこと」という呪縛から離れ、「ねえねえ知ってる？　ティラノサウルスってね…」というちょっとした話を聞くような気持ちで、助動詞の話に、お付き合いいただきたい。

はじめまして、助動詞。

おわりに

「数を数えて表を作るのが日本語学だと思っていました。」

講義でひとしきり語った後、学生からこんな感想が寄せられた時の、なんとも言えない気分をよく覚えている。日本語学でもデータに基づいた客観的・実証的研究が当然という時代になって、理論体系だけを語るような牧歌的な研究にお目にかかれなくなって久しい。かく言う私も、数を数えて表にする。それはそれで楽しくないわけではないのだが、学生の言葉にこもった閉塞感のようなものは、私の内側にも長年しみついている。

言葉について、言葉で理屈をこねる面白さ。言葉そのものに、壮大な世界を、宇宙を感じる、果てしなさ。相手がブラックボックスであることを前提にした「こう考えるとうまくいく」「こうかもしれない」という、自由で豊かな謎解き。暗記する道具でしかなかった活用形が、助動詞たちが、一つの世界を成しているかのように見えたときのワクワク感。学生時代の私にとってのワンダーランドは、片っ端から計数され表に切り出されて、気づけばすっかり色褪せてしまったようにも感じる。

研究と言うからには、「私にはこう見える」ではなく、数字やデータといった確さに立脚して、「万人にとってそうである」という客観性が求められる。その客観性を手っ取り早く担保する手法が、数を数えて表にするということなのだろう。それが悪いということではない。何事にもエビデンスや成果が求められる時代には当然の帰趨であろうし、計量研究には計量研究で、どのような切り口でデータを集め、それをどう評価し、関連づけるか、難しさと腕の見せどころは果てしなくある。ただどうしても寂しいのは、元々言葉の宇宙を解き明かす手段だったはずの数値化・データ化が、それ自身が言語研究の目的、あるいは研究そのものであるかのような顔をし出して、数値化され得ない、生身の言葉の世界がどこかに行ってしまったように感じられることである。私自身も含め、この分野に足を踏み入れる学生たちの素朴な関心・興味――「このコトバはどうしてこんな意味を表すんだろう」とか「これとあれとは意味が似てるけど、こういう時は似てないぞ」とか――は、もともと数を数えることにあったわけではない。

研究としては「言えないこと」「できないこと」。でもどうしても考えてみたいこと、伝えたい面白さ。行き場を失って沈殿していた興味は、ありがたいことに、教員になってからは講義という形で、研究とは少し違うところに居場所ができた。そのときどきに思いついたこと、気になっている文法事実などを、学生の反応を見ながら話して聞かせるうちに、徐々に自分の中でも考えが深まって育っていく。（全員とは言わないが、ときに）目を輝かせて聞いてくれる学生もいて、その中に、純粋に文法に興味を持った頃の自分の姿も見えるような気がしてくる。思えば学生時代の原体験も、先輩たちとたわいもない話をしながら「ああでもないこうでもない」と文法について雑談する中で考えが深まる楽しさにあったように思う。ゼミやプロジェクト科目を担当するようになってからは、今度は自分が教員の立場で学生と「ああでもないこうでもない」をやるようになり、（しばしば助動詞と活用形のカップリングの話になったりもしつつ）ゆるやかに学生たちと共有しながら、文法の世界を育てている――それが、今回本書として文字になったものである。

書いてみるとヒヤヒヤの連続だった。授業では話のノリと勢いで押し切ってきた部分が、文字にするとどうにもならない。授業なら1コマ90

分で一旦完結して、まあ誤魔化し切れるが、ページが続くとこれもままならない。授業でのわかりやすさと面白さ優先で簡単に飛び越えてすっきり説明していた話も、文字に固めるとなったら言い訳が増える。自分がいかにいい加減で、研究に向かない人間か、項目を書くごとに再確認することになった。それでもＰａｒｔⅠは可能な限り論理的整合性をもってまとめたつもりである。縷々述べてきたとおり、伝えたいことは新たな解釈でも精緻な体系論でもなく、とかく切り捨てられがちな「不確かであることの面白さ」である。そしてもう一つ、同じ興味を持って、誰かと思考を共有し議論することの楽しさも、内容として述べたこととは別に、おまけで伝われば幸いである。ＰａｒｔⅡという形で、私自身のものとも違う学生の世界観を示したのは、ただ「自由に考えていいんだよ」というだけではなく、相互に影響しあって考えが広がり深まっていく過程そのものが示せれば、という思いからでもある。学問研究が高度に専門化され、実証性を求められる現代ではどちらもなかなか経験しにくいことになってしまった。それでも「参考書があったら読みたい」と言ってくれる学生はいるので、少しは役に立つだろうか。

本書執筆の機会を与えてくださった昭和女子大学近代文化研究所、特に所長の烏谷知子先生に、あらためて深く感謝申し上げる。「研究」らしさからは程遠い私の話に活字化の機会をくださったこと、そして日頃、私の思いつきめいた無責任な話のキャッチボール相手になってくださったこと。先生には、純粋に言葉について考える面白さを思い出させていただいた。

それから、いつも助動詞で遊んでくれる学生たち。何年にもわたり私の話に付き合ってくれて、これを本にしたい、と思わせるまでに助動詞たちに息を吹き込んでくれた。見えない世界を可視化しようとする際、その可視化の仕方は数を数えるだけじゃない、もっと自由だよね、ということに気づかせてくれた。講義という形で文法を続ける道も示してくれた。自分が学生の頃はあんなに嫌だった学校に、毎朝ふんふん喜んで出かけていけるのは、諸君らのおかげである。

そして最後に、助動詞を始めとする、ことば。文法。「先生、なんで文法なんか好きなの？」と聞かれて「嫌いだよこんなもん」と答えるひねくれ者だが、それでも最近は……やっぱり嫌い、と言っておこう。